

# 教宣 せぶん

## どこに一線を引くのか！

「一線を画す」という言葉がありますが、公私の別を明確にしたり、自らの基準や理念を示したり、この言葉は意外に重要な意味を持つ言葉だと思います。特に、労働組合の運動をリードしていく者にとっては、この線を引く明確な場所があるだけに、常に「間違っていないか」「おかしくないか」考えなければならない基準線だと言えます。逆に経営の側から見れば、この一線をできるだけ曖昧に、薄く引かせることが狙いであると言えます。よしんばこの一線を違う場所に引かせることができようものなら、これほど経営にとって好都合なこととはなく、笑いが止まらないのではないのでしょうか？ですから私たちは経営の策略にのらぬよう、常に襟を正し、本質を見抜く目も持ち合わせていなくてはなりません。以前に、前本部委員長の話しとして「敵が誰かを見誤るな」という言葉を掲載しました。その話しの主旨も「どんな状況に追い込まれても、一線を画す一番大きな太い線は、常に経営と働くもの間に引かなければならない」という、分裂を策動されることを予測した中での、お互いにあてた強烈なメッセージだったと思います。

さて、そんな観点からいま私たちが置かれている環境を見てみると、異様な光景が目に見え込んでいます。私たちの組織にいる者は「提訴への報復」という理由で転進支援が撤回されました。話しは少し横道に反れますが「話し合いで解決しようと思っていたのに仁義を裏切られた」とこの経営は言います。しかし提訴したから転進支援を撤回するような経営が、話し合いで私たちの主張を聞き入れるとは到底思えません。団交の席に一度も決定権者が顔を出さない姿勢がすべてを物語っています。ですから、2月の提訴はごく自然な「定石」だったと思います。

話をもとに戻します。私たちの組織で転進支援を受けようと思えば、脱退し改組しなければ転進支援が受けられないという状況がつけられました。これ自体は狡猾な東海経営の違法な差別行為に他ならないわけですが、この構図をこの会社に働くものたちは「おかしい」と思わないのでしょうか？「あたりまえ」と感じるのでしょうか？私はこの光景、この構図はどう見ても異様にしか映りません。私だけではなく第三者の目である都労委も、「異常だ」「おかしい」「差別だ」「是正しろ」と言っていますが、本当に何も感じないのでしょ

うか？そればかりか、面接と称する「踏み絵」を行い、反省の色が見えなければ「却下」

するという行為に及んでいます。どうして、結果的に「この人には転進支援を行わない」などという権限が、一面接官のRAに与えられるのでしょうか？すべての構図は、狡猾な経営が書いたシナリオなので、局面、局面では、理屈が通っているのかもしれませんが。しかし、全体像を眺めれば明らかに「差別」ですし、違法行為です。「昔の仲間が昔の仲間を裁く」という皮肉な構図を経営が作っているのです。

例えるなら、学校の教室で「いじめ」が行われているのです。他の生徒は見てみぬふりをしています。しかし、実態は、先生が、自分の意に沿わない子供を学校から追い出そうと、自分の意に沿う子供にけしかけて「いじめ」を行っている構図です。先生はこうやったら「わからない」、こうやったら「うまくいく」という指示を意に沿う子供に出して、意に沿わない子供をいじめているのです。先生は、自分が赴任する前はこのいじめられる側の子供も、いじめている側の子供も、仲が良かったことを知っていて、仲間割れしていることを楽しんでいるのかもしれませんが。

先生がこのいじめの元凶だということに変わりありませんが、意に沿う子供も自分のやっている行為に気づかないものかと思います。線を引くところを誤ってしまうと、この差別が、この違法行為が、この全体像が見えなくなってしまうものなのでしょうか？